ICT 海外ボランティア会会報

No. 32

2012 年 5 月 11 日（金）

Home page　：http://www.ictov.jp/
e-mail　　：sv@info.nttob.org

目次

◆ 巻頭言
情報格差とＩＣＴ
建築家　　松本　文郎　氏

◆ 特別寄稿
マクロの立場でミクロ処理（真藤語録から その６）
本会顧問　　石井　孝　氏

◆ タイ国近況
活気があり力強い歩み
本会事務局長　加藤　　隆　氏

◆ 会員リレー寄稿（第１８回）
充実した時を過ごした思い出
当会幹事　　横田　悦男
（元メキシコ国派遣ＳＶ）

◆ 図書出版のお知らせ
事務局

◆ ＪＩＣＡ「メールマガジン配信登録」のおすすめ
事務局

巻　頭　言

情報格差とＩＣＴ

建築家　　松本文郎

大阪万博の 1970 年前後は、農業・産業革命に次ぐ歴史的転換点として、情報化時代の到来が声高に論じられ、「でんでんパビリオン」（基本構想会議に参加）の目玉だった、ワイヤ

レス電話機の無料体験“ふるさとコール”には、長い行列ができました。

あれから 40 余年、数次の施設拡充 5 ケ年計画、横須賀電気通信研究所（建築設計担当）での DIPS 開発とデータ通信の躍進、NTT 民営化と新しい事業展開などで、わが国の情報革命は大きく進展しました。

さらに、インターネットとケイタイの驚異的な普及が加わり、グローバルな情報化の発展で人類社会は大きく変容しつつあります。

電電公社の開発途上国への海外技術協力は 1950 年代に始まり、東南アジア諸国の電気通信近代化に貢献してきた光の反面で、カンボジアで育成した電気通信技術者の大半が内戦の犠牲となる悲惨な事態も起こりました。

私の海外経験は、イラン（1969 年）とクウエート（1970 から 4 年間）で、イラン電気通信研究所の基本計画策定とクウエート国電気通信コンサルタント業務です。イランのケースでは、テヘランに入る前、海外技術協力事例のタイとパキスタンの類似施設を視察して、公社の駐在員から建築計画の貴重な示唆を受け、イラン郵電省のカウンターパートとは心を通わせながら、異文化への好奇心を全開して、任務を果たすことができました。（T 新聞社開設「松本文郎のブログ」に長期連載中の『アラブと私』(56) 参照）

滞在が 4 年に及んだクウエートでは、テレコムセンター他 7 ケ所の工事現場の設計監理を行いました。夏季は日陰でも 46℃になる猛暑、和食と対照的な食事、熱砂の国ならではの現地人の働きぶりなどの勤務環境の過酷さもあり、スタッフの中には、異なる文化や生活習慣を理解し、心を通わせるゆとりのない状況も生じましたが、互いに励ましあってプロジェクトを完成させました。

第一次オイルショックで、突如、來クされた政府特使三木武夫氏が、若気の至りの直言を聞いてくださり、これからは君ら若者に活躍してほしい時代だと励まされたのを思い出します。電電公社独自の技術供与の双務契約（役務への対価を受けた）でしたが、産油国クウエートの電気通信近代化に貢献している現地スタッフの気持ちを伝えようと、ホテルの懇談の席で、対アラブ外交のノンビリさ加減への懸念を申し述べたところ、随行の一人、大来佐武郎氏（国際協力基金総裁・米澤　滋総裁と大学同期）に、面白い奴だから、日本に帰ったら遊びに来なさいと言われて、オフィスを訪ねました。

フセインのクウエート侵攻では、バスラに近い衛星通信施設が真っ先に破壊されましたが、テレコムセンター（二重外壁）はイラク戦車の砲撃に耐え、交換機はちゃんと動いていたそうです。

1970 年前後の中東の産油国では、欧米のメーカーやコンサルタントが電気通信近代化のプロジェクトをめぐって熾烈な競争を繰り広げていました。クウエートでは、イギリスが関与したスキャンダルが発覚して、パブリック・コーポレーションの NTT が選ばれたとききました。

チュニジアに端を発した“市民革命”の激震は、若者によるフェイスブックなど ICT の活用で、長い間、石油利権を独り占めしてきた軍事的独裁政権の国々に波及しました。

現在のシリアで、反政府の人びとへの目を覆う残酷な弾圧映像が瞬時に世界中に流れるのも ICT の力です。

世界金融に大混乱を招いたリーマンショックは、ICT を駆使して怪物化した金融資本がもたらし、数百万の大量の個人情報が流失したスマートホンのアプリ問題にみるように、ICT には、いろいろな光と陰があります。

人類文明が到達した情報革命は、人類の叡智である自由・平等を遍く手にできる可能性と情報格差がもたらす教育・貧富の格差増大などの危険性の両面をもっています。

世界の全ての人びとの人権を守り、経済格差をなくすため、「ICT 海外ボランティア会」のみなさんが、真の意味でのグローバルな ICT 普及に貢献する活動を展開されるように、こころから期待いたします。

（『アラブと私』の（53）以降に、米国の“コーポレイト・クラシー”に関する記事を紹介しています。ご関心があればご参照ください。）（了）

特別寄稿

マクロの立場でミクロ処理（真藤語録からその６）

本会顧問　石井　孝

【元ＮＴＴ社長 真藤 恒氏の語録】

ミドルマネージメントにとっていちばん大切なことは、マクロの立場に立ってミクロの問題を処理していくということである。

これさえできれば、ミクロの問題はばらばらの形で解決されることなく、整合性を保ちながら、同一方向に向かって解決されるものと思う。

ミドルが、こういったマクロの立場をとれるようになるためには、自分自身の仕事を社会的にどう位置付けるかについて、修練を積まなければならない。

具体的には、マスコミによる情報を積極的に吸収すると同じに、事務系、技術系のいかんを問わず、社会科学をしっかり身につけることである。

スペシャリストとして、いくら優れていても、それだけではもう企業や世の中に役立つとは思えない。

【石井　孝氏の一言】

この語録には直接関係ないが、マクロとミクロの話になると、昨今のプロジェクトマネージャーの問題を想起する。

某大手システム開発会社のプロジェクトマネージャーが忙しくてたまらないというから、どうしてかと尋ねると、数本のプロジェクトを掛け持ちしているからだという。聞いてみると、夫々のプロジェクトは結構な規模のものである。よくそれだけのプロジェクトの内容が把握できるものだと感心すると、中身などは分っていない、下請けの手配で大変なのだと、しゃあしゃあとしたものである。

昨今、プロジェクトマネージャーは、マクロをおさえていれば、ミクロはどうでもよい、

といった風潮があるように思えてならない。これは、とんでもないことである。
　プロジェクトマネージャーの中には、ソースコードの読めない輩が少なからず居ると聞く。事実、そんな連中を知ってもいる。これは、楽譜の読めない指揮者がオーケストラを指揮するようなもので、まともな音楽、いや、まともなシステムにならなくて当然である。

　この語録は、IHI の中堅幹部に話されたことではないかと思う。ここでいうミドルは、しっかりとその道を究めたスペシャリストであることが前提での話であろう。
　いい加減なミドルが、格好だけマクロな立場に立つと、とんでもないことになる。マクロの立場に立つ資格があるかどうかが先決である。

　電電で、真藤さんが表題のような訓示をされた記憶は、私にはない。まずは、しっかりしたスペシャリストを育成しなくては、と思っていたのであろう。

タイ国近況

活気があり力強い歩み

本会事務局長　加藤　隆

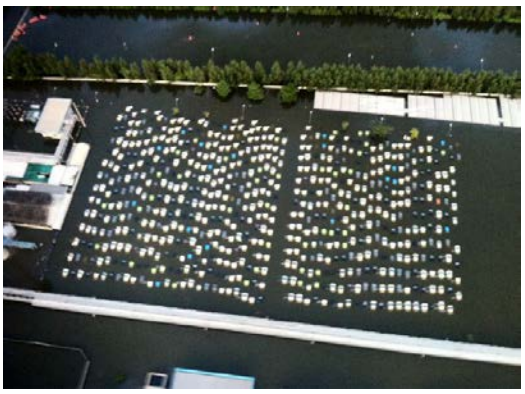
　3 月下旬にタイを訪れる機会がありました。またそれに先立って、東京でタイ国投資セミナーが開催ました。その時の様子も含めタイの近況を報告いたします。未曾有の大洪水により甚大な被害を被ったにもかかわらず、“活気があり力強さ”を感じました。現在では海外からの投資も増え、観光客も増加しているとのことです。

１．　大洪水

　冠水はタイ北部からチャオプラヤ河沿いに南下し、特に工業団地への浸水は大きな被害をもたらしました。
　被害状況(2011.10現在)は、被災者279万人、死者360人、首都を含む国土の約1/3の県が浸水し、特に日系製造業へ強烈な打撃を与え工場閉鎖は460社に及びました。これは世界経済へも影響を与え、自動車・コンピュータ周辺機器・各種部品等のサプライチェイン途絶につながりました。そのほか農作物は壊滅的で、一時観光客も激減しました（タイGNP1.7ポイント下落)。大洪水の原因は、異常な雨量（例年の1.4倍)、森林伐採、水田減反(工業団地化)、防止対策不徹底とのことです。
　バンコク日本商工会議所の調査によれば、日系企業に対する影響として、会員企業の約20%が直接、約80%が間接被害を受け、直接被害を受けた製造業企業の事業再開場所（複数回答）として、同じ場所85%、タイ国内の別の場所25%、タイ国外8%です。タイで継続する主な理由は、他国に移って熟練労働者を育てるには、相当の投資を必要とし、またリスクがあるからとのことです。また洪水に関するタイ政府への要望は、早期の治水計画策定、迅速かつ正確な

情報提供、再保険制度の創設とのことです。被害を被った日系企業の経営者から直接話を伺いましたが、工業団地から水は引いたものの、製造機器が水を被り、殆ど取り替える必要があり莫大な費用がかかり、完全復旧までにはまだ多くの時間を要するとのことで、その対応に大童でした。

一方では冠水した道路で水上スキーをしたり、優雅に舟遊びを楽しむタイ人もおります。これは将にマイペンライ（気にしない）で代表されるタイの国民性でしょうか。



出荷前の自動車が水浸した工業団地

優雅に舟遊びを楽しむ

２．　タイ投資セミナー

テーマは「洪水後のタイ経済と日本企業を取り巻く投資環境」で、2012年3月7日に帝国ホテルで開催されました（主催：アジア投資委員会）。タイからはインラック首相をはじめ、政府の要人が参加しました。首相の講演の中心は洪水からの迅速な復旧、洪水の再発防止で、これらを通して日本企業のタイでの継続的運営を訴えておりました。

治水管理として、工業団地防水のため堤防構築、道路の高架化、運河改良、気象予測の充実等を挙げておりました。また防災に IT 技術適用、そのために IT 等高度な人材の育成にも力を注ぐとしておりました。また被害企業に対しては、財政支援、低金利復興保険、法人税率低げ(30%から 20%へ)の施策をとるとのことです。

さらに今後の施策として、高い外貨準備高を目指し、日本などの外資系企業に対しては熟練労働者を提供する（現在最低賃金の上昇が行われている）、また低賃金労働者を求めるならタイの周辺の国へどうぞ！とのちょっと大胆なことを述べておりました。そして ASEAN 共同体の生産拠点として、ミヤンマー振興にも寄与したいとのことでした。

最後に、日本政府（JICA）による洪水による災害からの復興計画策定や無償資金による支援に、謝意を表しておりました。

３．　タイの印象

未曾有の洪水の被害に見舞われ、沈んだ雰囲気かと思いきや、反対に力強さが感じられました。かって日本の急成長時に感じたと似た感覚を覚えました。高架鉄道や地下鉄の乗客も一杯で、ショッピングモールも人がごった返しをしていました。

現在の日本とタイのこの違いは、端的に「日本の産業空洞化と、タイへの海外からの旺盛な投資」から来ているかも知れません。これは失業率の大きな差（おおよそ日本 4.7%、タイ 洪水前 0.2%とのデータがあります）にも現れているようです。

バンコク日本商工会議所の調査によれば、現地日系企業の経営上の問題点として、マネー

ジャーの人材不足、総人件費の上昇、現材料費価格上昇を挙げております。タイ首相の政策と相容れない部分があることが若干気になります。

また、政治面では現在一見平静ですが、現政権与党の元首相のタクシン派とアンチタクシン派の抗争は、現在海外逃亡しているタクシン氏がタイに入国した場合に、また人波乱ありそうです。タクシンはインラック現首相の実兄です。また治水対策について現地の生の声は、政府の対策は具体性がとぼしく計画倒れにならなければ良いがとのことでした。しかし「マイペンライ」の国タイは、遅々としてではありますが、力強く前進しているようです。

最後に一言。タイ人と日本人はどちらが幸福と感じているでしょうか。

国の幸福度ランキングでは、143ヵ国地域中タイが41位で日本が75位（英、新経済団体）、また他の調査では97ヵ国地域中タイが27位で日本が43位（スエーデン、ワールドバリューズサーベイ）です。物資も豊かで犯罪も少ない日本が、タイよりもずっと上位かと思っていましたがそうではありませんでした。さらにタイ人へのアンケートで、「生活水準の満足・やや満足と答えた方は74％で相当に高い数値を示しました。さらにタイの中で最も貧しいと云われているイーサン地方（東北部）では、不満と答えた方は僅か17.6％（News Cripによる）で、他の地域より最も小さいものでした。どうも幸福とは「物」そのものではないように思われます。（了）

会員リレー寄稿 第１８回

充実した時を過ごした思い出　･･･ＳＶ活動を終えた、その後･･･

当会幹事 横田　悦男（元メキシコ国派遣 SV）

2005 年 11 月～2007 年 11 月（第 1 回目）、2009 年 1 月～2011 年 1 月（第 2 回目）と 2 回に亘って私が　メキシコにおいて実施してきた、シニア海外ボランティアとしてのミッションも終わり、帰国してもとの生活に戻ってみると、折に触れ滞在中のいろいろな思い出が呼び起こされてくる。

期待に胸を膨らませて、メキシコの地に降り立ったのは、2005 年の 11 月上旬だった。日本から約 1 万 2 千 Km を、実際は 15 時間近くかかって到着したのだが、時差の関係で 2 時間ほどで着いたことになる。

（第 1 回目派遣）

何やら時間を得した気分と、やっとこれで長時間の飛行機旅の緊張感から、後一息で解放されるぞと思うと、次の日から待っている未知の業務への不安など、少しは気がかりはあるものの、私には珍しく少々ハイな気分になって到着したことを、昨日の出来事のように覚えている。

第一回目のミッションが終わって帰国後も、メキシコでもう一度指導してくれないかと言う温かい言葉を、派遣先で一緒に仕事をした同僚たちから数多く

いただき、再度シニア海外ボランティア活動に応募し、幸いにも選に選ばれて、2009 年から 2 年間を同地で過ごした。

私自身、日々、世間のしがらみなどにより、心身とも擦られ削られていくうちに、フレッシュであった時の感覚は失われ、驚くほど性格は丸くなってしまった。あたかも、風呂場や洗面所の石鹸箱の隅の方に、小さく縮こまって固まっている、使い古されてすっかり薄くなってしまった石鹸の残骸を、自分の姿に投影してしまう。

配属先から受けた感謝状の盾
（第 2 回目派遣）

“自分流の生き方で過ごす”、心の中では理想とするものの、これは一見簡単なようで、実際に実行するのはなかなか難しい。

私にとって自らの意志による 2 回にわたる SV 活動は、このようにいくつかの小さくなって使い難くなった石鹸を一つにまとめて、少しでも使いやすくしようとしたともいえ、しかも成否を予め予想できないが、自分流の生き方で過ごす一つの冒険だったのかもしれない。

各大学からの感謝状および講義実績証明書などと、活動状況を掲載された配属先広報の記事（一番下の真ん中）

ミッションを終わって改めて振り返ってみると、多くの友人・知人を得、さらには未知の経験を得て自分の可能性を再認識するなど、この決断は決して間違っていなかったと自信を持って言えよう。

彼の地では、自分の意思をある程度配属先に伝えながら仕事をしてきたが、100%その通りとなったかは疑問である。

私が相手してきた指導対象者は、国営の研究所や大学の研究員などの高学歴のエリート層が多かったので、聴講生相手に、「教える」などと言う大層なことよりも、相手から何を聞かれても即座に答えられるように事前準備をし、聴講生と一緒に考える雰囲気を作ろうと努力したが、結果をどう評価しているかわからない。

メキシコでのボランティア活動
最後の挨拶・・・送別会にて

本当の成果は後世の歴史が判定することだろうが、瞬間風速的には、帰国にあたっての送別会の雰囲気にその回答が存在していると、自分では判断している。その雰囲気を再現してみよう。

JICA メキシコ事務所の幹部や、配属先での最高責任者等の出席のもと、社員ほぼ全員参加して行われた、2 年間の活動最終報告会を終えて、日ならずして、派遣先での仕事納めの日、社員全員と来賓者など、100 名近くの参加者のもと、市内中心街にあるホテルで、クリスマス食事会を兼ねて、老妻も招待された盛大な送別会を実施してくれた。

会の終了に当たり私が最後に壇上で感謝と別れの挨拶をしたとき、参加者から自然発生的に、私の名前を連呼するコールが沸きあがり、「もう一度戻って来いよ！」の言葉と共に、熱い抱擁とベソ（頬へのキス）を数多くの人から受けた。

まさに心温まる情景で、活動に対して喜ばれたことに感謝する気持ちと、職場の仲間への

別れへの感傷が入り混じり、不覚にも瞼が熱くなってしまった。送別会で涙腺が熱くなったなどとは、過去何10回となく経験してきた、会社内でのお仕着せの送別会では決して起きなかった現象で、私自身もこのボランティア活動に参加して、本当に良かったなと実感できた一瞬であったと思う。

テキーラの杯を心静かに傾けると、メキシコでの滞在の数多くの出来事など色々な情感が、頭の中を走馬灯のように駆け巡ってきて、一人静かに歌を口ずさむのであった。

「 知らず知らず 歩いて来た　細く長いこの道
振り返れば 遥か遠く　故郷が見える
でこぼこ道や　曲がりくねった道　地図さえない それもまた 人生
ああ 川の流れのように　ゆるやかに
いくつも時代は過ぎて　ああ 川の流れのように
とめどなく　空が黄昏に染まるだけ 生きることは 旅すること
終わりのないこの道
愛する人 そばに連れて　夢探しながら 雨に降られて
ぬかるんだ道でも　いつかは　また 晴れる日が来るから
ああ 川の流れのように　おだやかに　この身をまかせていたい
ああ 川の流れのように　移りゆく季節　雪どけを待ちながら」
（「川の流れのように」作詞：秋元　康、作曲：見岳　章　歌：美空　ひばり）

しかしミッションが終わった現在はと問われると、私は考えてしまう。帰国した後、外国滞在中での自分らしい生き方と比較した、“これからの自分らしい生き方を、どの様に過ごしたら良いだろうか？”

それとともに、「これからどうするのか」、「再度海外へ行くのか」、「せっかく身につけたノウハウを活用しないのは、何とももったいない」などの声が、多くの方からきこえてくるようになった。

これらの声を聞くまでも無く、今までの生活で得た貴重な経験を、何らかの機会があれば、今後とも役立たせたいと思っている。現に今でもメキシコから助言を求めるメールをいくつかいただいており、その都度対応しているが、責任問題と絡んでこのこと事態良いことかどうかの判断は難しい。

いつでも再度SV活動に参加したい気持ちは十分有しているのだが、すでに、派遣資格年齢制限という厳然たる壁が立ちはだかっている。今考えられることは、まずスタートとしてSVOB会などに参加して、情報交流を深めようと思っている。

活動の思い出も、アルバム帳を時代の新しいものから逆順に見るごとく、カラー写真の鮮明な色彩から、時の移り変わりとともに黒一色のモノトーンになり、やがてセピア色に変色していくように、時が過ぎ去るに従って、ほとんど忘れ去ってしまうことだろう。

何もかも忘れ去ってしまわないうちに、経験したことを少しでも記録に留めておかねばと言う気持と、老境に入った自分を少しでも奮起させる意味で、海外生活を振り返った滞在雑感を思いつくままままとめており、ほぼ完成に近づいた。

そんな折、JICA 筑波から、「小学校での出前講座」および、「応募事前説明会での体験談」という思いがけない話をいただき、私自身初めての経験だが引き受けることにし、過日実施した。

特に小学生相手の授業は、メキシコで大学等の研究員相手の講義と異なって、逆に難しく実に新鮮な経験になり、次の機会があるかどうかわからないが、心の中では密かに次の機会を期待しているくらいである。

以下は、「JICA 筑波のホームページ」の記事から私の関係する部分のみ引用させていただいた。

国際協力出前講座 in 牛久市立神谷小学校

2 月 28 日(火)、牛久市立神谷小学校にて、6 年生 112 名の皆さんを対象に、 国際協力出前講座を行いました。

「一生けんめいお話を聞く 6 年生の　　皆さん」

「一つの事がらには、多くの見方・考え方がある」(元シニア海外ボランティア・ 横田悦男さんのお話)

次に、元シニア海外ボランティアの横田悦男さん(メキシコ・品質管理)からお話を聞きました。

横田さんはまず、一枚の絵がいろいろな物に見える「だまし絵」を示して、「一つの事がらには、多くの見方・考え方がある。特に世界へ出て行った時には、自分自身の考えをしっかりと持つ必要がある」ことを説明しました。6 年生の皆さんは、同じ絵でもいろいろな物に見える絵を見て、「すごいー」と驚いていました。「人によって、また国によって、多様な文化や考え方がある」ことがわかってきました。

横田さんは、メキシコのたくさんの写真を見せながら、メキシコの街の様子や文化について、また 400 年に渡るメキシコと日本のつながり(歴史)について説明をしてくれました。
横田さんは、メキシコでの活動体験から「自分の国のことを知れば、世界のことも少しずつわかるようになる」と感じたそうです。「世界に出て行った時に、自分の地域(牛久市、茨城県)についてよく知っていること、自慢できるものは何か言えることが大事」とおっしゃっていました。

神谷小学校の皆さんからお手紙を頂きました

「神谷小 6 年生の皆さんから頂いたお手紙」

関さんからは「友達になることの大切さ」を、横田さんからは「世界に目を向けるとともに、身近な自分の地域について知ることの大切さ」を教えて頂きました。6 年生の皆さんは、一生けん命お話を聞き、質問に答えたり、メモを取ったりしながら、積極的に学んでいました。
後日、神谷小 6 年生の皆さんから、すてきなお礼の手紙を頂きました。どうもありがとうございました。もうすぐ卒業する皆さん、中学へ行っても、今日の講座を忘れず、世界の人々について、世界の国々のようすについて、学び続けていって下さい。
以上引用終わり

以下は応募説明会での、個別相談会に先立って行われた、もうひとりの SV 経験者とのパネルトークで話した主な内容である。会場では、JICA 担当者の司会のもと、以下の話をした後、もう一人のパネラーと二つのグループに分かれ、個別相談会が行われ、参加者からの色々な質問に対して、
経験上得た体験談を話した。応募者の今後の健闘を祈念したい。

1．派遣概要、
2．自分の技術がその要請に合うとして応募したのか、
3．派遣が軌道に乗るまでの苦労話
4．帰国後の社会還元

体験報告会･･･JICA 筑波から写真をいただいた

終わりに

社会に少しでも恩返しをしたいという思いで、会社を辞してまで参加した前回のミッション、そして 2 度目のミッションを終えるにあたって思うことがある。

男は人生を過ごす間に、何処かで一度ならず冒険してみたいと考える人も多いと思うが、私にとって自らの意志による海外勤務は、そのたった一度の冒険だったのかも知れない。また自分に何が欠けているかを、はっきり認識する機会でもあり、期待に違わない生活を送れたと思っている。

神様が今後、どれだけ生きる期間を許してくれるかどうかはわからないが、最終目標としては、いつの日か自分が過去に仕事をして来た国々を再度訪問し、滞在していた当時と比較して、どの様に変化しているか、自分の過去の仕事の証を、自分の目で確かめて見たいものである。（アフターフォローの制度があればもっと良いのだが。）　そのときこそ自分の成果が問われるときだと思っている。

図書出版のお報せ

事務局

去る平成 24 年 4 月 20 日、「一つの国際協力物語・タイのモンクット王工科大学」（荒木光也著、国際開発ジャーナル社）が出版されました。

内容は、わが国 ODA の典型的な成功例として語り継がれ、現在タイの有数な大学に発展している「モンクット王工科大学ラカバン」の誕生と発展に寄与した、梶井剛（当時電電公社総裁）、松前重義（当時東海大学総長）、牧野康夫（当時電電公社バンコク海外事務所初代所長）の三氏の英断・活躍を中心に、ドキュメント風に紹介されております。

わが国の将来を視野に入れた技術協力の真髄を実践されたことに敬意を表すと共に、啓発されること大なるものがあります。一読をお奨めいたします。

4 月 26 日に出版記念パーテイ開催されました。発起人として、田中明彦 JICA 新理事長、白石隆政策研究大学学長や、渡辺利夫拓殖大学総長等のご挨拶がありました。

著者荒木光也氏は国際開発ジャーナル社代表取締役・主幹で、この分野のわが国の先駆者であります。本図書はソフトカバー240 ページで、1,800 円＋税 です。

メールマガジン配信登録」のおすすめ

事務局

当会顧問・JICA 青年海外協力隊事務局募集課長 佐藤　睦氏からのおすすめです。
SV および JOCV 募集案内等情報満載の「メールマガジン配信登録」をしてください。
きっと皆様のお役に立つと思われます。

手順は次の通りです。

① Internet Explore で「JICA」を検索
② 「JICA-国際協力機構」を選択し HP を開く
③ 右手の JICA ボランテイア をクリック
④ 情報満載メールマガジン をクリック
⑤ メールマガジン配信登録 をクリック
⑥ 所定の個人情報を記入

- （http://www.jica.go.jp/volunteer/index.hotmail）

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集部　加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) ,または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

・「巻頭言」は松本文郎様にいただきました。松本様はかって、イランとクウエートにおいてコンサルタントとして活躍なさいました。電電公社およびNTT海外ビジネスの先駆者のお一人として、当時のご活躍の様子を披露されました。見習うべき点が多々あり、当会の活動に当たっても励まされます。松本様は NTT グループきっての文化人でもあられ、その活動分野は深く且つ広く、その一端は氏のホームページに掲載されております。
(URL は http://blog.onekoreanews.net/nrn/)　　(加藤)

・「会員リレー寄稿」に横田悦男さんに、寄稿頂きました。私は時々「ようこそ先輩」という NHK 総合テレビで放送される番組を観ていますが、「神谷小学校」で実施した出前講座を読んで「ようこそ先輩」の番組を彷彿し、感心しました。　　(村上)

総編集長　：ICT 海外ボランティア会　事務局長　加藤　隆
編集長　：ICT 海外ボランティア会　報道部長　　村上勝臣
発行　　：　ICT 海外ボランティア会　(メール：sv@info.nttob.org/)